

# 時を超えた沈黙

長井 潔

休憩中に煙草を吸いながら上司と交わすのは、他愛ない話と決まっていた。しかしあの日、上司は意味深に呟いた。

「こういうのをセクシヨナリズム（部門中心主義）という」

開発が他部署からの横やりでつぶされたことを指していた。部署を超えた連携の難しさを示す言葉らしい。

「だから私は、自部署だけで完遂できる仕事を作りたいんだ」

なるほどこれが会社か、とは思えなかった。とても窮屈な働き方だと感じた。

だが、まさか自分がこのテーマを追い続けるとは、25年前のこの時には思いもつかなかった。

偶然手にした本が、日本の権力構造を解析していた。国の実質的な支配者は官僚だが、政界、財界とともに三すくみの状態にあり強いリーダーシップは生まれえないという。連携の難しさは権力のトップでも同じだった。セクシヨナリズムは日本のどの組織でも起こりえる、と悟った。

その後自分自身も部門横断的なプロジェクトのリーダーとして働き、セクシヨナリズムを痛感した。開発は失敗し、会社を辞める一つの理由になった。

次にひきこもりや精神障害者を支援する仕事に就いた。若い時に対人恐怖症だったので、同じ思いの若者を支えたいと思ったのだ。

ひきこもり支援は家族からの依頼で始まる。その多くは活動に理解があり協力的だったが本場に本人のためなのか、首をかしげたくなる行動も見えた。

例えば仕事のように合理で支援を考える親がいた。正論を投げても本人は動けない。むしろ本人への圧力になった。

「世間に顔を合わせられない」と言う親もいた。その実、顔を合わせられないのは本人ではなく親の方なのだ。叱咤激励しても、体面を気にする親の心は見透かされ、本人が向かう先は社会ではなく親になりがちだった。暴力沙汰も起きた。

逆に本人にただ優しく接する親もいた。それによってもひきこもり状態は維持された。何にせよ親の行動は本人の出立を遮る壁になりがちだった。結果的にひきこもりもっている主体が本人というよりは家族全体にも見えた。家族が一つの単位であり、個々の成員からは見えない風景があった。一方で家族は外部とも遮断され、孤立していた。そのありよう

はセクシヨナリズムと同じ匂いがした。しかし家族は政治や企業の組織ではなく、この用語は当てはまらない。

支援した若者の自死をきっかけに、さらに問題を掘り下げたいと願った。社会学の教科書をあさった。

中根千枝の社会構造論によれば日本は「場の社会」であり、数名からなる「小集団」の場を基本とする。これは政治や企業の組織にも、家族にも当てはめられる。私が求めている概念だと直感した。

セクシヨナリズムも小集団の特徴として示されていた。一部門で数名の小集団、その部門長が集まる上位の会議もまたそれ自体が小集団、とタテにつながる。この連鎖を通さない、部署を超えたヨコの連携はできないのだ。

そして行動の主体は個人ではなく小集団にある。個人は属する小集団の他の成員に目配りできなければならず、本当の意味での個性は発揮されない。たとえ組織の長でも部下と仲良くやれねば突き上げられる。

ひきこもりの家庭でも、父親の叱咤激励が空回りするわけだった。家族のまとまりがまず大事、との示唆を得た。

一方、世の中ではひきこもりの原因を発達障害とする論が増えてきた。改めて調べてみた。その特性の一つ「自閉症スペクトラム障害」は小学生から見受けられ、一言では空気を読めない特性だという。

驚いた。発達障害の存在一般は疑うべくもないが、これは全くおかしい。そもそも空気は周囲が醸し出す。空気を読めないとは、周囲と本人との相互作用の結果だ。つまりこれは個人ではなく「場の特性」だ。その主体が小集団だとすれば腑に落ちた。学級の中で目配りできない子が周りからはじかれている、いじめの一手手前の状況だ。

問題の主体が小集団なら個人を診てもわからないし、個人に対処しても解決はしない。しかし医療が新たな障害名を打ち出すのに対し、この社会学の命題は全く市民権を得ていない。集団の観点で問題を取り扱う人はいないのか。

義務教育現場からの声を拾えた。木村泰子（1）は、小学校のいじめは教師の指導から生まれると喝破していた。子供同士のトラブルが生じたときに教師が悪者を決めてダメ出しすることで、子供同士がつながらず、やがて誰かがはじかれていく。

教師の孤立も見抜いていた。職員室では「問題児」の悪口をもって教師同士の一体感を醸成する。教師自身が救われたいのだ。

木村が小学校の校長になった当初は、手探りの運営だった。ある朝礼で、自身の長話に多くの生徒が辟易しながらも黙る中、ふだん言葉の出にくい子が

「校長先生、おしまい！」

と大声で指摘した。特性のある子が場の空気を読まずに正しく指摘してくれて、木村の目から鱗が落ちた。特性のある子を特別支援学級に押し込むのではなくて、その子から周りが学べるのが大事だと考えた。支援学級は作らず、不登校による転校生も丁寧を受け入れた。

問題を抱える子は日替わりで現れた。担任一人では対処しきれないと考えた。そこで学校を地域に常時開放し、全関係者で学校の全生徒を見るよう改革した。孤立する小集団を作るのではなく、全ての場を全関係者で共有してつなげた。子供同士で直接に学びあい自ら考え動く子を育てた。

木村は問題を個人に帰すことなく、集団の場の改革に成功したと思う。

ところが木村によれば、一般にはどんどん支援学級が増えている。学習規律を守れないと障害が疑われ、支援学級に入れられる。場を改善するよりも、個人にレッテルを張る方が優勢なのだ。私が発達障害を調べて危惧したことが、現実に進行していたのだ。

日本は今も場の社会だろう。だが場の問題はいつも置き去りにされてきた。個人に焦点を当て障害云々する方が周囲には都合がよいのだ。それら全ての人にも関係ないなんて思わせない、シンプルで圧倒的な事実を、誰か持つてはいないのか。

21世紀に入ってから明かされた、旧海軍参謀の証言を見つけた。NHKの取材陣がアジア太平洋戦争の「海軍反省会」の記録を初めて取材したのだ(2)。対米開戦に向ける参謀たちの強硬姿勢は、実は、陸軍に対する対抗意識や、軍事予算確保のために出されたポーズだったという。国家を見ず海軍という自セクシヨンの理にしか従わなかった。つまりセクシヨナリズムが必敗の対米戦争を起こし、結果的に300万人以上の日本人の命が奪われたことになる。

中でも一つの言葉に圧倒された。

「やましき沈黙」

元海軍大佐の生前の口癖だった。

「現代に通じる海軍の問題ということはとても理解できる。例えば、父は『やましき沈黙』という言葉を生前何度も何度も語っていた。：特に開戦についての話をするときよく使っていた。これではいかんと思いつながら、やめることができずについに戦争を始めてしまう、海軍のそういう問題をとて悩んでいた」

この言葉は、セクシヨナリズムや小集団と比べ、より内実に食い込む表現だ。小集団の中で沈黙が許されない中心者ではなく、周囲にいる助言者が問題の焦点だとしている。海軍の場合では意思決定者である天皇や総理大臣や海軍大臣を指してはおらず、対米開戦へ

と切られた舵の方向修正を助言できなかった、作戦参謀の沈黙に問題を見る。セクションの部下としての立場に囚われ、国家への忠言を沈黙させたのだ。

この言葉なら、自分の会社員時代の経験もよく理解できた。部門横断的なプロジェクトを提案した時、会議の当初は開発関連の部長全員が反対していたのに、社長がやるうよと言うと誰もがカラッと賛成に回った。その割に誰も活動を支えてはくれなかった。提案した自分よりも、精査することなく支持した社長よりも、反対していたのに社長に右に倣えした部長たちの「やましき沈黙」こそ問題だったのだ。あの会議の違和感こそ会社を辞める動機になった。

中学校での出来事を思い出した。他人の喧嘩を煽る番長がいた。指摘すると攻撃の矛先をこちらに向けられ気持ちが悪くなった。それで無口となり対人恐怖症へと続いた。今まで番長のせいだと思っていたが「やましき沈黙」は別解釈を迫る。喧嘩の際に周囲にも生徒はいたが、私以外は誰も何も言わなかった。私の対人恐怖症は、実はその周囲の生徒が作ったのかもしれない。

現代のいじめも、いじめる者、いじめられる者に加え、傍観者、無関心者という四層からなる。「やましき沈黙」は一番の当事者であるいじめる者やいじめられる者を指さず、周囲の傍観者と無関心者に焦点を当てる。教師の、悪者を決めてダメ出しする指導が周囲の生徒に沈黙を植え付けてはいないか。それが傍観者や無関心者を生み、いじめの温床を作ってはいないか。

その教師も孤立に疲弊している。クラスというセクションを一人で抱え込み沈黙し、周囲と助言しあえてないのだろうか。

ひきこもり支援は家族からのSOSで始まる。だが本人はすでに数年から十数年ひきこもっている。その間に家族は効果的な行動を取れず、沈黙してきたのだ。

他の様々な問題にも「やましき沈黙」が差し挟まっているのではないか。

確かに強いリーダーシップや強い個人は望ましい。だが「場の社会」の日本でそれは困難だ。従って助言者の行動が結果を左右する。なのに無関心、傍観しようとする。

これもまた日本人を縛る不文律ではないか。家族、学級、職場、自治会、役所、PTA……今ほどの集団でも存在し、その是非を問われてもいない。放っておけば、今後も家族や学級の間を通り過ぎて若い世代に継がれるだろう。

海軍大佐が発した「やましき沈黙」は、ご子息を経て数十年を待ち、取材陣が拾い上げ私の元まで届いた。この奇跡をつないでいきたい。